

さかべつとうの浄土 （新潟県）

むかし、あるところに、魚釣りのじょうずな男がいました。

ある日のこと、男は、屋根のふきかえをしようと、村の人たちを集まってもらいました。すると村の人たちは、

「おまえさんは、魚釣りがうまいから、きょうは屋根のふきかえはおれたちにまかせて、魚を釣ってきてごちそうしてくれないか」といいました。男は、

「それなら、屋根のほうはたのみます」といって、釣りざおをかついで川原へ出かけました。

男がいっしんに魚を釣っていると、いつのまにか、側に美しい女の人立っていて、じつと釣りを見ていました。男が顔をあげると、女の人は、ほほえんで、

「おまえさん、さかべつとうの浄土へ行ってみませんか」と話しかけてきました。男は、なにげなく、「ああ、行ってみよう」と答えました。女の人は、

「それでは案内しますから、少しのあいだ目をつむっていてください」といいました。男が目をつむると、女の人は男を背負って水にもぐったようで、しばらくすると、

「ここがさかべつとうの浄土です」といいました。

目を開けると、そこは、今まで見たこともなければ聞いたこともないりっぱな御殿の中でした。おどろいてあたりを見まわしていると、大勢の美しい女の人がいろいろなごちそうを運んできました。男は喜んでお腹いっぱい食べました。食事が終わると、女の人たちは、こんどは、美しい舞を舞って見せてくれました。

毎日ごちそうを食べ、楽しく遊んでいるうちに月日がたち、ここに連れてきてくれたあの女の人が、自分の婿になつてくれないかといいました。男は喜んでしようちしました。

ゆめのように楽しい日を送っているうちに、子どもが生まれ、まごが生まれ、ひまごも生まれました。

ある日のこと、男は、ふと、ふるさとのことを思い出しました。

（おれは、屋根のふきかえの日に川原へ魚釣りに出たまま、こうやって長い年月を楽しく暮らしているけれど、家はもうなかっただろう）

そう思うと矢もたてもたまらなくなりました。そこで、女の人に、

「家のことが気になるので、いちど帰って見てきたい。すまないが、もとの川原まで送ってくれないか」といいました。女の人は、

「そんなことなら、しかたがありません。送ってあげましょう」といって、男を背負いまして。

男が目をつむっているうちに、川原に着きました。見ると、釣りざおが置いてきたときそのままになっています。急いで家に帰ると、屋根のふきかえのまつ最中です。村の人たちが男に気づいて、

「もう帰ってきたのか。こんなに早く帰ってきたのでは、魚もたいして釣れなかっただろう」といいました。男は、何がなんだか分からなくて、ぼかんとしてしまいました。やっと気を落ち着けて今までのことを話すと、みんなは、

「ふしぎなこともあればあるものだなあ」といい合いましたとき。

おしまい

＊ さかべつとう 七、八月ごろの日の出の前に、大群をなして川面をさかのぼる白いチヨウの一種。太陽ののぼるころには死んで川を流れていくという。

＊ 浄土 この世のすべての苦しみをはなれた安樂の世界。極樂のこと。仏教のことば。